

説教「ひとつになろう」

(詩編 136 編 1-9 節 コリントの信徒への手紙(一)12 章 12-27 節)

2021 年 4 月 25 日 主日礼拝

日本基督教団 仙川教会

大串肇牧師

第二回目の伝道旅行の途中、使徒パウロは 1 年半、現在のギリシアにあるコリントという都市に滞在し、伝道を行いました(使 18:11 参照)。ユダヤ人や異邦人の改宗者によって教会は誕生しました。パウロの去った後、アポロと呼ばれる優れた伝道者が伝道したことでも有名です(アレクサンドリア出身のユダヤ人)。いわばエーゲ海対岸である現在のトルコに到着し滞在していた時、パウロがエフェソという都市に滞在中(I コリ 16:8; 使 19:1 以下参照)、パウロはコリントの教会に数度手紙を送りました。紀元後 55 年から 56 年の春のことでした。

なぜ、パウロがこれらの手紙を書いたのか、執筆の動機として、パウロに対するコリント教会の人々からの質問に対して彼は答えたのです。コリントは地中海貿易によって経済的に富んでいました。しかしコリントのアクロポリス(丘)には、街の主護神であるアプロディーテーの大神殿が築かれていました。そういう異教的世界であったのです。教会は発展したのですが、異邦人改宗者が多い中、あまりにも自由な雰囲気の中、教会内には多くの指導者がいたこともあって分派や深刻な対立が生じていました。そこでパウロはキリスト者の交わりについて、この世との関係や実践的な教えを中心に手紙を書いたのです。

あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。(27 節)

まさにこの言葉はコリントの教会のみならず、わたしたちキリスト教会にとって最も基本的かつ根本的命題です。パウロは教会を人間の体に譬えました。そして一人一人は、足や手、目や耳のような体の一部であり、全体がひとつの口だけでも、手足だけでもなく、組み合わせさっていると説いたのです(14-19 節参照)。このようにバラバラな人間がひとつのからだになること、組織としてまとまることはパウロならずとも当時の人々にも説かれていました。しかしながら、この「体」には特別の意味があるのです。つまり、教会は「キリストの体」であるということです。別の言い方をすればキリストがわたしたちの交わりの「中心」であるということです。「キリストの体」とは、人々を愛し続け、そして苦しみを受け、そして十字架上で殺らされた人間としての体です。しかしそれで終わりでは

はなく、まことの神として復活された「体」であることです。ですから、わたしたちはキリストの十字架と復活に対する信仰によって一つになることが出来るのです。しかしそのようにわたしたちが考えられるのはわたしたちの努力や能力で出来ることではなく、キリストに対する信仰、が必要です。しかし、その信仰も洗礼を通して神が与えて下さる恵みなのです。

あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。(12-13 節)

「霊」を「飲む」とは独特の言い回しです。聖餐式の葡萄酒の事なのか、洗礼式の水の事なのか、いずれも考えられます。しかしここでは洗礼について語られていると考えられます。洗礼こそ、まさに聖霊の働きであり、神の助けがあつてこそ、信仰は洗礼を通して与えられる。そういう恵みなのです。そのことを印象深い譬えのような言い回しでパウロは描いていると考えられます。

最後に、パウロがあえて「体」という言葉にこだわったことです。この体という言葉は実は「霊」と対立する概念です。コリントのある人々は優秀なクリスチャンはこの「霊」を、あたかも悟りを得るように知識を積み上げて獲得できると考えました。ですから体などは取るに足らない、霊こそが永遠だと考えたのです。そこで霊を獲得できないクリスチャンたちを差別して、分裂や対立が起きたのです。

人間の体は弱さの象徴です。病気や怪我で損なわれ、最後は死ぬ定めです。ただその事実出来る限り目を向けないようにしているだけです。しかしある時それが現実のものとなるのではないのでしょうか。事実、わたしたちは誰もが弱さを抱えながら生きているのです。ですからパウロは言います。「目が手に向かって『お前は要らない』とは言えず、また、頭が足に向かって『お前たちは要らない』とも言えません。それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです」(22-23 節) と。ですから「(あなたがたは) キリストの体」であるとともに、「一人一人は」弱さもかかえながらの「体」であり、「その部分」なのです。ですから…、

神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです (24 節後半—26 節)

わたしたち「キリストの体」なる教会に求められているのは互いに配慮し、共感することです。しかしこれはパウロが命じている事柄ではなく、既に教会に与えられている事実として語っていることに注目してください。分裂しかけているコリントの教会でさえ、配慮と共感がある。それはある意味で奇跡です。そしてそこにパウロは希望を見出しているのです。というのは、どんなに弱さがあるとも、それにもかかわらずわたしたち地上の教会は「キリストの体」である、そういうパウロの確信は決して揺ぐことがなかったからなのです。つまり、イエスはわたしたちを見捨てずに、配慮し、わたしたちに寄り添ってくださっているからです。これこそ恵みであり、わたしたちの信仰の土台になることを信じてまいりましょう。キリストの体として互いに配慮し、心を寄り添う「ひとつ」になりたい、と願います。お祈りしましょう。